１９９７年１２月２１日の夜明け前に私が金峰山山頂にいたことを証す者は、産業情報センター勤務の石田譲治氏、百名山登山家の山本哲夫氏、信越化学勤務の本多立也、富田儀男両氏の四人だ。しかし彼らとて私が今から記す富士山に関する事実を証すことはおそらくあるまい。だから私の証言が事実であることを証すのは私のみであり、従ってその信憑性を疑われても仕方がない。しかし以下に述べるような描写は、おそらくどんなに想像力に長けた作家でも実際に目撃したのでなければ叶うまいと思われるのだ。
我々は日の出前に金峰山小屋を軽装で出た。月光が八ケ岳、赤岳の頂の雪を闇海に浮く小島のように浮き上がらせている。ヘッドランプで足元を照らしながら雪道を登る。岩の間を道がくねり、ニホンカモシカの足跡が散在する。やがてあたりが明るみ始めたので私はヘッドランプを消した。振り向いて見ると八ケ岳も赤岳も雪帽がピンク色になりかけていた。雲海は下界を白くどんよりと塞いでいた。そして空からは星が消え、月も輝きを失い始めている。

月と言えば、私は、金峰山小屋で窓際に寝ていたのだが、夜半に目が覚めて目を見開いたとき月を窓越しにまともに見てたじろいだ。始めはあまりに鋭く明るいので近くに水銀灯でもあってそれが輝いているのかと思ったが、すぐにそれはありえないことと悟ると、自分の目を射ているのが月であると知った。こんな強烈な月光は下界では知らない。私は寝袋の中に顔を大方埋め目を月光から隠した。
山頂の天体の眩しさのことなら石田氏もこの夜経験した。彼は３時過ぎにトイレに行くために山小屋を出た。そしてふと上を見て驚愕した。一つ一つの星が月の３分の１の大きさがあるかと思われたほど強く冴えたオリオン座が小屋の真上にあって、この星座がまるでその名の大狩人が両手両足を構えてまさに彼に襲いかかってこようとしているかのような迫力を発していたのだ。畏敬の念を抱いて寝袋に戻った彼はその後６時の起床までに２０余りの夢を見たというから、このオリオン報告も誇張ではあるまい。
さて、山頂に着くと日の出ずるほうの雲海はすでに赤らんでいた。遥か彼方の孤峰富士は太陽の昇ろうとするところよりずっと右手にあってその背後で地平線を形成する雲海はまだ鼠色にくすんでいた。さらに右手に南アルプスが薄闇の奥におぼろに見える。
ここより見る富士は左右対称の点では今までに見たどの富士よりも最もバランスが取れている。従って美というものをその字体どおり定義するならば、金峯山の富士が全く一番美しい。
私は頂上を形成する岩山に昇りちょうどいい石椅子を見つけた。それは二つの大きな岩から構成されていた。背板と座板だ。そこにすわって背中をもたせ、足を投げ出すとちょうどリクライニングシートに座っているような格好となる。太陽の兆光と富士とが共に私の視野に納まっている。こうして私は御来光を待った。
下から太陽に射られて輝きを増している雲海は、昔堺の住友金属の溶鉱炉を間近で見たときのことを思い出させた。表面に浮くどす黒い未溶解の金属を下から赤く輝く灼熱の熔湯が少しずつ解かしてゆく。

ふと富士の方はどうなったかと右手に視線を移したとき私は壮大な天を見た。富士の此方に長いが厚みの薄い高雲が水平に延びており、これがちょうど富士の頂点をかすめていた。すなわち私の位置からは彼方の富士の頂と同じ高さに見えた。この水平雲は闇と曙光により赤褐色に彩られ、雲海によって構成された灰色の地平線と平行であり、これら遥かなる二本の水平線と富士の左右に均斉の取れた雄大な稜線とが天という字を描き出していたのだ。仰天だ。それは横長の異様な天ではあるが、富士はこれを堂々と揺るぎもなく支えているというふうで、むしろこの字の力は縦の方向にあった。
「ほら御来光」いつのまにか私のいた岩場に上がってきていた山本氏が指差して言った。見ると、左手の雲海の上に小さな丸い太陽が輝いて私たちを真横から強い光線で射た。そしてそれは南アルプスの雪嶺をくっきりとオレンジ色に浮き上がらせ、あれほど私の目をくらませた月をタバコの煙のようなかすかな存在にさせてしまった。夢のようだった世界が日の出と共に覚めた。

photos of the author: amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro